て常の言の如く、生涯を終られたといふことである。其命終の時などは、既に一ケ月程前から、床の間には三尊の來迎佛を掛け、窃かに覺悟をされてあつた。其の命終の前日には、頭を剃つて風呂に入り、其の翌日の午後三時頃、炬燵の中で念佛を稱へながら、眠るが如くに往生なさつたといふ事である。此は大正十年の十一月の二十日であつた。歿後管長猊下より、其の功績を表彰して大僧正の號を贈られた。先生は常に質素を旨とし、着るには多く綿服を用ひ、老に至るまで桐下駄を穿かず、粗食麁菜に甘んじて、信施の恐るべきことを繰りかへされた。誠に佛の敎に適ふ、意義ある生活であつたと言はねばならぬ。されば先生の生涯は實に高潔といふ二字が、最もふさはしいと思ふ。戒名は莊蓮社嚴譽上人功阿護法義城大和尙といふことも一言諸君に紹介して置く。

思ひ出した事ども

石橋誠通

吾々のクラスが天台の研究に趣味をもつたのは蓋し東京時代であらふ、宗敎大學がまだ巢鴨に移らない已前、あの小石川の豚小屋時代、卽ち姉崎さんからはマッチボックスと輕蔑せられた昔の本校の遺物、其後高等學院とか宗敎大學院とか、宗敎大學と

か色々に名が變つたが結局あの傳通院の裏手にみすぼらしく建てられた豚小屋時代に、前田慧雲博士が毎週二時間宛、天台の講義をして下さつた頃天台といふ學に趣味を感じたのであつた。前田博士はいつもボヤ〳〵した鬚を剃らずに片手で摩でながら、餘り流暢な辯ではないが而も懇々と、說き去り說き來らるゝには誰れしも同じく引き付けられたであらうと思ふ。前田博士は或る都合上途中から職を辭せられねばならぬ事になつたので、其の後は大鹿上人が補講をして下さつて一通り天台を聽いた譯であつたが、此頃確かに天台學の趣味は養はれた。又我宗として考へて見ても宗祖大師、二祖上人は皆天台から轉宗された人である、摩訶止觀の念佛やら、慧心僧都の念佛やら、我宗のすべての敎義を解釋する上にも又圓頓戒を了解する上にも、最も關係の深いのは天台の敎義である。此等の諸點は益々天台趣味を盛んにした原因であらう。

◎

吾々のクラスは最早や卒業も近付いて、吾々銘々は各の幹事寮へ呼ばれた。而して將來の專攻科目の志望を尋ねられた。其の時の答は期せずして皆な天台專攻の希望であつたのは不思議である。それ故吾々は天台專攻といふことにきまつて、京都へ上

つて來たのは確か小西存祐君、石井龍善君、岩崎敲玄君、高井善成君、千葉良導君、吉川大雲君、大島玄瑞君、稻岡冠順君、中井玄猷君、川村諦音君、小川祖賢君、松岡白猷君、尾崎澂心君、和田良順君、故梅崎舜興君、故青木淨元君と僕との十七人であつたと思ふ。其後又水谷徹成君、松岡行覺君、村上妙淸君及び日蓮宗の大崎大學を卒業した藤井行勝君も入つて來て大分人數も增して來たが、然し二十人內外であつた。

◎

常時宗敎大學分校(今の鹿ケ谷佛敎專門學校)の大立物は勤息上人、大鹿上人、土川上人の三人で、福原隆成師が幹事を勤めて下さつた。其頃吾々の專攻は言ふ迄もなく天台であつて勤息先生が每日法華玄義を二時間宛四日間講義をして下さつた。先生は殆んど休みなく每日車に乘つて最初の時間から來て下さるのが常であつた。偶には一日宛休まるゝ事もあつたがメツタに休まるゝ事はなかつたのだ。先生に一つの面白い趣味があつた。其れは非常に芝居が好きであつたといふことである。僕等は終に劇場で先生に逢ふことはなかつたが、或るものは時々逢ふた事もあつたので、偶に先生の休みの時は、先生また昨夕は芝居かなといふて皆なのものが笑ふた事もしばしばであつた。だから講義の引例など、芝居の話の出たのは珍しくなかつた。先生の講義

振は極めて早辯で聲色に高低がなく至極單調であつたから、浮つかりして居ると解らずに通つてしまふことが多かつた。僕等が東京で授業を受けたのは、皆んな筆記であつたのに、京都へ來てからすつかり調子が變つてしまつて、訓詁的な講義であつたから、初は大分まごついた、特に僕は要事があつて少々おくれて登校した。だから玄義の一の卷は最早や大分終つてあつた。急いで朱墨を買いに往くやら、朱筆で書き入れをあせるやら、一寸一時は困らせられた。

◎

先生の講義に先生が最も大事にしておられたのは筆記帳で、此の筆記帳は隨分大冊のものであつたが、幾度も〳〵も修正校訂されたものらしい、消した所もあり、後から入紙した所もあり、又其の上へ粘り付けた所もある樣に見へた。講義の初めに此の筆記帳が一番先に机の上に陣を取る、面して次に原本、次に昆布茶、次に日鏡といふ順序は遂に一度も亂れた事はなかつた。所が先生の講義は、本文よりも多く筆記帳に依つて居らるゝので、吾々は早くより朱筆を握つて、待ち構へて先生の講義を一々書き入れ樣と思ふても、何分早辯の例の講義であるから、悉く皆な書き取るといふ譯にも參らず、惜しい所を書き落す場合が度々である。或る日の事、某が大事な所を書き落し

たので、殘念に思ひ、授業が終るや否や早速ツカツカと先生の所に到り、先生只今大事な所を書き落しました。どうぞその筆記帳を一寸見せて下さいと願ふ。先生あわてゝ早速筆記帳を仕舞ひかけ、イヤイヤ筆記帳は見せられませんと急いで布呂敷に包んでしまわれた。その態度がいかにも面白かつたので、皆のものが一度にどつと笑ひ聲を擧げ、勤息さんの筆記帳とて其後時々話題になつた。

◎

然し學問には忠實であつた。曾て東京小石川の傳通院が燒けた時、あけの日各新聞に記事が載せられてあつた。僕等が朝八時前に學校へ登つた時に皆なのものが騷いでゐる。傳通院が燒けたげな、ウム傳通院が燒けたテ、先生は傳通院の住職だから今日は先生はお休みであらふ。マサカ御出になる樣な事はあるまいといふて新聞を見て居ると、先生の車はいつもの通り櫻の坂を登つて來る。イヤ先生が見へた。傳通院の燒けた事を御承知がないと見へる。イヤそうかも知れぬと騷いで居ると先生平氣で教員室へお這入り、大鹿上人早速新聞を手に持つて先生の前に進み、昨夜傳通院が燒けた。そうですが御承知ですか、ハイ傳通院が燒けましたテ、本當ですか、本當テ此の通り各新聞に出て居りますがナ、ハイどうして燒けました。鼠が蠟燭を喰はへて落したの

が火元で燒けたと書いてあります。鼠が蠟燭を喰へて燒けましたテ、ヘイ妙なこともあるものですな、然しそれは捨てゝも置かれませんといふてアワテヽ二條の大恩寺へ歸へられた。其後間もなくまた登校して相變らず講義をされた。講義の前には必ず一度下見をすまさねば登校されなかつた。若し下見が出來ぬ場合は缺席されたといふ話であるから、此の時も恐くは下見が急がしくて新聞を見る暇さへなかつたであらふ。序手に一寸付け加へて置きたいのは、勤息先生の書見中には、ドンナ人が訪問しても唯今は書見中でありますから、どうぞ又御出下さいといふて、遠慮も會釋もなかつたといふ話だ。又本箱には何れも皆な必ず鍵をかけて置いて、見る時丈けは其れをあけすめば直ちに鍵をかけらるゝが常であつたと聞いて居る。書物といふものには餘程執着してゐられたと考へるより外はない。

◎

洪鐘は叩くを待つて鳴るといふ言もあるが先生は何か或る問題を尋ねるとそれからそれへといくらでも話されたものである。先生が目鏡をはずして本を離れて、皆なの顏を見て話しかけられたものならば、それはいくらでも續いて出たものであつた。中には隨分感心する樣な趣味ある說も出た事がある。或る時の事、話の序手に左の

如き話を話された。此の學校の生徒は多く傳道を目的とするといふことだが、傳道をする先づ第一の着眼は聽衆の機根を見るといふことだ。天台で觀法を敎へるにも觀法を早く成就させやうと思ふなら、對手の機根を見るといふことが第一だ、例へば五停心觀を敎へるに就ても、不淨觀、慈悲觀、數息觀、因緣觀といふ順序でやらすのが當り前だが、對手の都合で必ずしも一定の順序が定つて居る譯ではない。對手の者が若しも鑄掛屋の爺さんであつた場合には、毎日タタラでフイゴ、フイゴをやつて居るから息を數へる數息觀に類して居る。それ故に先づ第一に數息觀を敎へて後に不淨觀等を敎へるがよい。若しも對手が洗濯屋の婆さんであつたならば毎日洗濯して體のきたない事を能く知つて居るから、不淨觀を先にやらせて後に數息觀をやらするがよい、所が其れと反對に、洗濯屋の婆さんに最初に數息觀を敎へ鑄掛屋の爺さんに初めに不淨觀を敎へるならば、其れは勞多くして功少なしであるから、皆さんも先づ傳道し布敎をするにはどう敎へたら効果が多いかといふことを先づ第一に考へるのが最も必要でありますと言はれた。此れは何んでもない樣であるが、一寸思い付きが而白いではないか、天台の學者として其の材料を取るのが甚だ振つて居ると思ふたから一寸此に付け加へたまだ此の外に色々面白い逸話もあり、感想談もないでもないが恐く諸君の記事と重復するであらふと思ふから、今回は先づ此れで擱筆することゝする。